

第2回愛知県立芸術大学施設整備ビジョン検討会

(2010年7月15日)御中

奥村 昭雄

第1回検討会に提出いたしました私の意見の中の大きな問題点は2つのことでした。一つが「直して使ってほしい」ということで、もう一つが「基本設計のあの位置に新音楽学部棟を建てることについて、再検討していただきたい」ということであります。どうか私の意見を皆さんで討議していただきたい、と希望します。

本日は第2回の検討会にあたり、さきの二つに加えて、もう一つの意見を提出します。これも検討してください。

今まで保守監理をしてこられた方々の苦心の結果について、極めて実際の報告を聞かせていただきたい。そのことによって、始めて現実的に「直して使う」道が開けてくると思います。予算の節減になることなので、県も賛成してくださるにちがいません。具体的なデータを公開してください。工夫の方法についての相談に参加させてください。当初からの建物について、全く価値を認めてくださらない場合をのぞき、協力を惜しみません

第1回検討会での見学で指摘された、建物についてのさまざまな問題点を聞きますと、全て解決・善処すべきものと思われる。現時点では、設計の時とは異なる、追加する要求があると思いますが、今、必要なことは、良くないとされるものを全て洗い出すことです。そしてそれらをどのような方法で改善・解決するかを考えるとときです。今までのものが全くどうしようもなく使えない、との判断であれば、それは、それが正しいのです。しかし、本当に全く使えないのですか。改修・増築の方向を検討したのですか。見学の過程で紹介されたものには、メンテナンスまたは改善という範囲で対応可能なものが相当あったと聞いております。音楽学部棟の天井に弓がぶつかるとの指摘に対しては、天井高が高い建物を増築するということになるのでしょうか。どこもこれも機能を満たしていないとの説明であったそうですが、例えば、奏樂堂への楽器の移動は、搬入口と搬送エレベーター、屋根つき搬送路の設置で解決できませんか。問題である、と指摘されたことについての検討は順次行えばよいと思います。全部がダメだ、と言って壊してしまうのは残念です。もしも、当初の設計者に、工事についての現場監理がゆるされていたならば、また、その

ような概念が確立してはいないけれど、建物が使われだしてからの保守監理という仕事が設計者に与えられていたならば、現在のような、いわゆる老朽化や機能面での不具合には至っていなかったであろう、という残念もあります。今後のことになりますが、新しい領域への大学としての取り組みが計画されるかも知れません。中期目標・中期計画には記載されていない様に思いますが、積極的な将来への展開を期待します。どのようなことにも協力を惜しみません。

もう一つ申し上げたいのはこのキャンパスの独特な美しい雰囲気をごどのように考えておられますか、です。芸術において「美」の追求は永遠のテーマです。感性を育てることが大事な使命である芸術大学にふさわしいこのキャンパスは、DOCOMOMOと建築家協会から、価値ある建築として認定され、平成18年3月に発表された「愛知県大学改革基本計画」において「県立芸術大学の校舎の改修について、厳しい財政状況を踏まえ、年次計画を作成の上、貴重な芸術的資産の価値を損なわないことに配慮し、計画的な整備を検討する」とされています。

可能であれば、ではありません。将来にむけて使いつづけ、持続することの価値を、愛知県が率先して社会に示すこと。それが可能な方法を考え出し、実現してゆくことこそ、芸術大学の使命であると思います。これからの社会は環境保護と持続性がテーマです。

さいごに付け加えます。検討会なのでですから検討するにはどのような方法があるか。スケジュールの決め方については会に出席する方々の都合を少しは聞いてほしい。また、公開の原則を実行するのであれば、傍聴がもう少し入れるように机の配置を変えとか、部屋を変えとかしてほしい。急いでいても充実した討論ができる条件を、敢えて作らない、と思われぬようにしてほしい、と願います。